
水華

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

水華

【Nコード】

N7774C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ネイティブ・アメリカンに古くから伝わる。恋の話。この世ではどうしても結ばれないワヨタとオジータは魔法使いの術を受けてようやく結ばれる。その姿は。悲恋です。

第一章

水華

アメリカの古い話である。星辰湖のほとりにサラナク族というネイティブの部族が住んでいた。

彼等は勇敢で力強い部族であった。その中でもワヨタはとりわけ勇敢で強い男であった。

背は高く身体つきは逞しい。その力は強く素手で野牛を倒すことができた。飛ぶ鳥を掴むこともできたし湖の鱒を倒したこともあった。そうした若者だった。

精悍な顔だがその目は優しい。彼は勇者であったが心優しい勇者であった。

彼は人を愛することもできた。恋人もいた。彼女の名はオジータ。大柄なオジータとは違い小さく華奢な姿をしている。顔は儂げで今にも消えてしまいそうである。ワヨタはそんな彼女の儂げな雰囲気こそ愛し村にいる時はいつも彼女と一緒にいた。

「オジータ」

ある日彼はオジータを湖のほとりに連れてきた。湖は青く澄んでいる。その青い湖を見ながらオジータに言うのであった。

「今度の狩りでな」

「何かあるの？」

「野牛を一頭捕まえてくる」

彼はそう言った。

「それを御前にやる。いいな」

「いいえ、それはいいわ」

しかしオジータはその言葉を微笑んで拒んできた。

「野牛なんて大変よね。だから」

「じゃあ何がいいんだ？」

「これよ」

すつと足元を指差す。そこには白い一輪の花があった。指差してから優しい顔で微笑んできた。

「これが欲しいの」

「花か」

ワヨタはその言葉に微笑む。彼も優しい顔になっていた。二人は同じ微笑みを浮かべていたのであった。

「ええ。それで」

「控えめなんだな」

ワヨタはオジータのその言葉に対して言う。

「いつも」

「いいえ。私は欲張りだと思っわ」

だがオジータは自分自身をこう評してきた。

「だって。いつも、何時までもワヨタと一緒にいたいから」

「そうか」

「ええ。いつも一緒にね」

「そうだな。けれど」

ワヨタはここで暗い顔になった。嫌なことを思い出してしまったのだ。

「御前の父親は」

彼女の父親は頑固な男だった。この村の実力者でもあり他の部族との友好の為に娘を外に嫁にやろうと考えているのだ。そのことはワヨタも知っていた。

「何とかなるわ」

それでもオジータは言う。辛そうな顔で。

「だから」

「何とかするのか」

「ええ。だから安心して」

「わかった。じゃあ俺も頑張るからな」

ワヨタもまた。二人は何があっても一緒になるつもりだった。その想いは一緒だった。その想いを共有していた。心は同じだったの

だ。

しかしオジータの父はそのことを知らない。ある日娘に対して言ったのであった。

「御前の嫁ぎ先が見つかったぞ」

家の中の火の前で言う。二人は向かい合って座っていた。そこで娘に告げていた。

「えっ」

「ニカルイ族だ」

そう娘に言ったのであった。隣の部族で長い間サラナク族と対立している。その部族の有力者と対立を続けていたのである。

「その村長の息子とじゃ」

「私が？」

「そうじゃ。いいな」

深い皺が刻み込まれた顔であった。オジータには似ておらず精悍な顔だ。その顔でじつと娘を見ている。下から燃える火が彼を照らし出していた。オジータは自分もそうなのだと思いつながら父の顔を見ている。しかし火が照らし出すその顔は父のものとは全く違っていた。

「これでサラナクとの衝突はなくなるのじゃ」

「そうですか」

「そうじゃ。わかったな」

有無を言わせない言葉でオジータには何も言えなかった。そんな彼女の心は父は知らなかった。知っていたとしてもどうにもならなかったであろうが。

第二章

オジータは困ったことになったと思った。もうどうしようもないのだと。思い詰めた彼女はワヨタに対してそれを言うのであった。

「決まったのか？」

「ええ」

また湖の前にいた。青い湖を眺めながら話をする。

「もうすぐしたら村を出て」

「どうにもならないのか」

「私がいなくなったらそれでサラナクとは」

「そうだな。戦いが続く」

ワヨタにもそれはわかる。戦いが続けばそれだけ悲しいことが続く。どうしようもないのはわかっていた。

それでもだ。何とかしたいと思う。何としてもだ。彼はどうにかして今のこの有様を自分達の望むふうにしたいと考えていた。しかしそれはどうしようもない。戦争が続き多くの者がなくなることには彼にしても避けなくてはならないことだった。

「私諦めたくない」

オジータは湖を見ながら述べた。

「何があっても」

「しかし村は」

「ええ。けれど」

俯いてしまう。湖が見えなくなった。

「村は」

「どうしたらいいの？」

「オジータ」

ワヨタは俯いてはいない。じっと湖を見ている。そうして湖を見たまま語るのであった。

「俺は森に一人知っている」

「誰なの？」

「魔法使いだ。年老いたな」

「その人なら何とかしてくれるのかしら」

オジータはそれを聞いて彼に問うた。

「多分」

彼は言う。

「行くか？そこに」

「ええ」

オジータはワヨタのその言葉にこくりと頷いてきた。

「それなら」

「わかった。じゃあな」

二人は村の近くの森の魔法使いの家に向かった。そこに入ると小柄で暗い部屋の真ん中に蹲って何か骨を手繰っている老人を見た。

その老人は目を閉じている。見えないようだ。しかし彼はワヨタとオジータが家に入ると扉の方にゆっくりと顔を向けてきたのであった。

「ワヨタか」

「ああ」

ワヨタは彼に応える。それから彼の前にやって来た。

「そろそろ来ると思っていた」

老人はワヨタが自分の前に向かい合って座わったのを感じてから述べた。

「言いたいこともな」

「そうか」

「そこにいる娘か」

閉じられた目をオジータに向けた。見えてはいない筈なのに見えているようであった。

「綺麗な娘じゃな。残念なことじゃ」

「残念な、ですか」

「うむ」

老人はオジータに答えた。

「御主等二人はこの世では結ばれぬ。それは運命じゃ」

「運命か」

「運命はどうにもならぬ」

そう二人に述べた。

「わしの魔術でもな」

「じゃあどうしたらいいんだ？」

ワヨタは老人に問う。今の彼の言葉に顔を暗くさせていた。

「俺はオジータと一緒にになりたい。オジータも俺と」

「人としては。どうにもならぬ」

「人としては、か」

「だからじゃ」

目を二人に向ける。やはり閉じられている。

「御主等は湖に行くのだ、二人でな」

「二人でか」

ワヨタはその言葉を聞いて目を暗くさせる。顔もまた。

「左様、二人で湖に入れ」

「湖にですか」

「左様」

またオジータに言う。

「わかったな」

「湖に入ったら俺達はどうなるんだ？」

ワヨタはその暗い目で老人に問う。

「入ったら」

「入ればわかる」

彼は言う。

「しかし。それで御主達は人ではなくなる」

「人では」

ワヨタもオジータもその言葉が心に刻み込まれる。彼等の部族も精霊、人以外への信仰がある。それでも人でなくなるといふのは怖

いことであつた。彼等は思い詰めた。

「だが一緒になれる」

「一緒にか」

「そう。ずつとな」

そう彼等に言う。

「どうするのじゃ。どちらを選ぶのか」

「……私、それでもいい」

オジータは俯いていた。俯いているが意を決した。

「ワヨタと一緒にいられるのならそれでいいわ」

「いいのじゃな」

「はい」

オジータは決めた。彼女のその決意を見てワヨタも決意した。

第三章

「俺もだ」

彼は言った。

「オジータとずっといたい。それが果たせるのなら人でなくてもいい」

「迷いはないな」

「ああ」

老人にも答えた。

「だから。行く」

「わかった」

老人はそこまで聞いて頷いた。頷いてもう何も止めはしなかった。

「ではな。幸せになるのだ」

「幸せに、か」

「人の世だけが幸せではない」

老人はそう二人に告げた。厳かな、まるで神のそのような声であつた。

「他にも幸せがあるのだからな」

「そうなのか」

「悲しいことじゃがな」

老人はそう述べると俯いた。俯いて何も言えなかつた。

「人の世は幸せだけがあるのではない。悲しみも苦しみもある」

真理であつた。悲しい真理である。

「それから逃げられなくても。生まれ変われば」

「生まれ変わるのか」

「そうしてなればよい。二人でな」

そう言つて二人を送り出した。ワヨタとオジータはその足で湖に向かつた。もう夜になつていて月明かりを頼りにして湖に向かつたのであつた。

静かに澄んだ湖は優しい鏡になっていた。そこに森の木々と白く大きな月が浮かんでいた。満月が静かに浮かんでいた。二人はそれを並んで見ていた。

「ワヨタ」

オジータが彼に声をかけてきた。

「ここに二人で入ればいいのね」

「そうだ」

ワヨタも彼に答える。

「そしてずっと一緒に」

「人でなくなっても」

「それでも一緒にだ」

彼は言う。

「ずっとな」

「ええ。もう離れることなく」

オジータは俯いた顔で述べる。

「一緒にね」

「オジータ」

二人は互いの肩に身体を寄せた。そのまま湖に一步一步入っていく。二人はゆっくりと湖の中に消えていった。白い月が優しい光を放ち二人を見守っていたのだった。

二人はそれから姿を消した。彼等を見た者は誰もいない。サラナクの者もオジータを嫁に貰う筈だったニカルイの者も二人を探したが遂に見つからなかった。そのかわり別のものを見つけたのだった。

「おい、あれ」

サラナクの者の一人が他の者に声をかける。

「あれを見るよ」

「どうしたんだ？」

「湖だ」

サラナクの者だけではない。ニカルイの者達もそれに応える。彼が指差していたのは湖であった。

そこに今までなかったものがあつた。それは花だつた。水に咲く花、水蓮であつた。

「あの花はまさか」

「そうじゃ」

ここであの魔法使いの老人が出て来た。目は見えないがそれでも彼等に告げる為にやって来たのだ。

「あの二人じゃ」

「花になつたのですか」

「うむ、この世では一緒になれぬからじゃ」

「馬鹿な、どうして」

それを聞いたオジータの父が呻く。彼もまた娘のことが気掛かりで探し回っていたのだ。

「どうしてこんなことを」

「人の世では結ばれぬのなら。別の世でということじゃ」

「それであの花に」

「花ならば。別れることはない」

彼は言う。

「じゃからな。こうして」

「花ならば、ですか」

「うむ。決して別れることはない」

老人はじつと花を見ていた。それはただ湖の中に浮かんでいる。

何も語らない。しかしそれは決して離れることない。湖の中に咲いている。

この花は二つの部族にとって愛情を表わす花となつた。それは人としては結ばれることのなかつた二人のことを思つたことである。ワヨタとオジータは人間として結ばれることはなかつた。だが花として一緒になることができた。二人は今も湖の中で咲いている。

水華

水華

2
0
7
·
3
·
4

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7774c/>

水華

2009年7月1日21時21分発行

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。